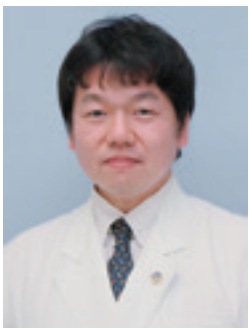


先輩に続け

徳島大学で 生涯の基礎を磨く

聖路加国際病院呼吸器内科副医長
西村直樹（にしむらなおき）



略歴 Profile

- 1995年 徳島大学医学部卒業
徳島大学医学部附属病院研修医
(第三内科、救急部・集中治療部)
- 1996年 徳島大学大学院医学研究科
内科系専攻(内科学第三講座)入学
- 2000年 徳島大学大学院医学研究科
内科系専攻(内科学第三講座)修了
医学博士(徳島大学)
徳島大学医学部附属病院医員(第三内科)
- 2001年 東京都老人医療センター医員(呼吸器科)
- 2003年 聖路加国際病院医員(呼吸器内科)
- 2008年 聖路加国際病院副医長(呼吸器内科)

私は1995年に徳島大学医学部医学科を卒業し医師になりました。早いもので医師になってからもなく19年になろうとしています。改めて自分の医師人生における徳島大学の存在と影響の大きさをしみじみと噛み締めています。

学生の自分は学問をすることで、私は学業優秀であったかどうかはわかりませんが、医学部の講義にはできる限りきっちり出席しました。多くの医師にとっては卒業2年間の臨床研修(現在は必修)が幅広く臨床医学に接する最後の

機会であり、その後は自分の専門領域を決めてキャリアアップしていくものです。しかし専門を極めれば極めるほど自分の専門領域以外の病気は診断も治療もできないという「専門オタク」現象が起りかねません。これから医学を志す若い世代の方には、ぜひ医学部学生時代のうちに幅広い医学の知識を貪欲に吸収しておいてもらいたいと思います。たしかに講義のうまい先生と苦手な先生の差はあるでしょうが、どんな講義でも得るものがない、ということは絶対

はないはず。私が徳島大学医学部時代に教わった自分の専門外の医学の知識は今でも役立っています。

人生の転機は突然に

その後、徳島大学大学院医学研究科に4年間在籍し、内科学第三講座(現在の呼吸器膠原病内科)でがん免疫やがん転移の研究をしました。続いて、国内留学的に東京都老人医療センターに派遣していただき、呼吸器病学の臨床研鑽を積んだところで人生の転機が訪れました。臨床病院として全国的に有名な聖路加国際病院で呼吸器内科の常勤ポストがあくのでやってみたいか、というのです。もともと東京都老人医療センターでの勤務を終えたら徳島大学病院に帰任するだろうと思っていたので予想外でしたが、東京での仕事ぶりを見ていてくれた当時の部長の先生の



聖路加国際病院呼吸器内科のスタッフと(本人左から3番目)

推薦であり、個人的にも徳島で学んできた自分の医学が聖路加で通用するの腕試ししたい気持ちもあり、当時の第三内科教授であった曾根三郎先生に相談いたしました。返事は予想外で、「人の上に立つものは部下にチャンスを与えることしかできないものだ。やってみなさい」というありがたいはなむけの言葉をいただいて聖路加に赴任することになりました。

大学院で次の10年間の武器を得る

医師を目指す後輩のみんなに覚えてほしいことは「卒業10年たったら脊髄反射は一緒」ということです。呼吸器内科専門なら、気管支内視鏡ができる、胸腔ドレーンが入られる、気管切開ができる、などの脊髄反射は卒業10年たったら大差はないのです。

むしろ卒業10年目以降の医師の存在価値が何かといえば、「問



回診風景(本人中央)

題解決能力があるかどうか」ということです(これも曾根先生の口癖でした)。壁にぶち当たったときにどのように問題解決をするかが指導医の存在価値であり、私の場合には大学院で問題解決の仕方をみっちり学んだことが、臨床病院に来て非常に生きています。大学院で医学の基礎や考え方を探求し、科学論文を検索したり記述したことは、即、臨床上での問題解決につながる共通の手法でした。同じようなことが専門医に求められる資質でもいえます。専門医とは何か。私には明確な答えがありません。ファイナルアンサーを出せることです。なかなかそうはならない。なので日々勉強するのです。

後輩の皆さんの活躍を期待しています。



海外 体験記

私はもともと関節リウマチや骨粗鬆症などの病的骨吸収に関わるRANKLシグナル(破骨細胞の分化と機能を調節するシグナル)の研究に携わっていた関係で2009年10月から2012年の9月までの約3年間、米国ミズーリ州セントルイスのワシントン大学・病理免疫学講座の破骨細胞研究で有名なSteven Teitelbaum教授のラボに博士研究員として留学する機会を得ました。

セントルイスはアメリカ中西部に位置する小都市で、内陸性気候のため夏は摂氏40℃、冬はマイナス20℃を超える寒暖差の激しい土地です。東海岸や西海岸のような都会感や娯楽はありませんが、人々が素朴で優しく、古き良きアメリカが残る街です。ミシシッピ川を臨むダウンタウンには、セントルイスのシンボルであるゲートウェイアーチがあり、開拓時代、この街を起点として川を渡り大西洋へと向かった人々のフロンティアスピリットが象徴されています。私には以前から「将来、ぜひア

セントルイスWashington Universityに 研究留学して

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 再生修復医歯学部
顎口腔再建医学講座 口腔顎顔面矯正学分野(歯学系) 助教

井澤 俊 (いざわ たかし)



本人右端、中央一番背の高い方がSteven Teitelbaum教授

メリカに留学したい」という希望がありました。ラボの窓からこのゲートウェイアーチを見るたびに、念願叶い自分がアメリカのど真ん中に来ていることを強く実感していました。

しかしながら、骨研究では世界屈指のトップラボですので、留学前には良くも悪しきもいろんな噂が耳に入り、当初はかなり不安でした。日本とは違い以心伝心や行

間を読むことなどあり得ないと思っていましたし、実際、最初にポストと研究テーマを話しあった時、早く生活に慣れるようにみんなをサポートはするがあなたがこのラボで成功するかどうか我々に責任はない、頑張れ、幸運を祈るといわれました。最初の半年ではラボでの生活には次第に順応できたものの、実験も必死に頑張りました。がデータはあまりでませんでした。

しかしこれが彼のやり方で実際は結果にでないものの次第に頑張りを認めてくれたせいもその後もいろいろ気にかけてくれるようになりました。一旦、プロジェクトの核となるデータを見つけた後は、それまでとは正反対で、毎日のように彼のほうから足を運び、データや次の実験計画について細かく指導してくれるようになりました。長い出張から帰るとポストク全てに声をかけまわります。その時でも以前のプロジェクトの進行状況を逐一覚えていたのですから、その記憶たるや驚異的です。彼はトップジャーナルにこだわりますが、本物の発見は広く世界場で議論されるべきという信条と共に、研究者の独立には必須だと強く考えているからです。

その後私は、c-Src(チロシンキナーゼ)を介したRANKとインテグリンβ3(細胞表面の接着分子)複合体がいかに破骨細胞の細胞骨格および骨吸収能の制御において重要な機能を担っているか、その新たな機構を解明できたことで論文が通り、その時ポストは、我が意を得たりと手放しで喜んでくれました。そんなラボの窓から仰ぎみたセントルイスの青空に映えた街のシンボル、ゲートウェイアーチは、時には少し恨めしく映ること

もありましたが、逆にその開放的な環境が大いに気分転換となり、私の貴重な体験の糧となったことは間違いありません。

稿を終えるにあたり、このような貴重な機会を与えていただきました田中栄二教授、不在中に多大なるご迷惑をお掛けしました口腔顎顔面矯正学分野の皆様、留学前後でお世話になりました先生方に、この場をお借りしてお礼申し上げます。



セントルイスのシンボルゲートウェイアーチ